

短 報

大学が地域に開く子どもへの「からだのおはなし会」実践報告

中村めぐみ¹⁾ 高橋 恵子²⁾ 大久保暢子²⁾ 大田えりか²⁾ 山路野百合³⁾A Report on the Program of “Human Body Storytelling Sessions” for Children
Conducted by the University in the CommunityMegumi NAKAMURA¹⁾ Keiko TAKAHASHI²⁾ Nobuko OKUBO²⁾ Erika OTA²⁾
Noyuri YAMAJI³⁾

〔Abstract〕

The “St. Luke’s Health Navigation Spot: Lukenavi,” opened by St. Luke’s International University in the community, provides health information services with the aim of creating a society where citizens take the initiative to protect their own health. As we are located in the Tokyo metropolitan area, we started a new program of human body storytelling sessions for children. For teaching materials, we used picture story shows, picture books about the human body, and T-shirts about internal organs, which were created as part of the university’s 21st Century COE program to teach pre-school children about the human body, and arranged the content based on the storytelling sessions held in the project. Six sessions were held in 2021, and a total of 21 children participated, ranging in age from 4 to 11, with an average age of 5.7. According to the questionnaire, most of the children answered that it was fun, and all of them said they would like to participate again, with a satisfaction rating of 8.75 (on a scale of 0-10). The children preferred to be active, interacting with the instructor, touching the models, and coloring, and it is thought that the interactive nature of the program led to their satisfaction. Parents also responded positively to the program, and it was an opportunity for parents and children to deepen their understanding of the body. We would like to continue this activity in the future and refine the contents together with the citizens.

〔Key words〕 People-Centered Care, Health Education for Children, Education of the Human Body

〔要 旨〕

聖路加国際大学が地域に開く「聖路加健康ナビスポット：るかなび」では、市民が主体的に自分の健康を自分で創り守る社会をめざした健康情報サービスを行っている。首都圏にある地域の特性を踏まえて新たに子どもを対象とした「からだのおはなし会」を始めた。教材は本学21世紀 COE プログラムの一つとして就学前の子どもに体のことを教えるために作成された紙芝居・からだの絵本・内臓Tシャツを活用し、内容はそのプロジェクトで行っているおはなし会を参考にアレンジした。2021年度6回開催し、参加した子どもの総数は21名で、年齢4～11歳、平均5.7歳であった。アンケートでは殆どの子どもが「楽しかった」、全員が「また参加したい」と回答し、満足度平均8.75（0-10数式尺度）だった。子どもたちは講師と対話したり、模型に触ったり、ぬり絵をしたり能動的なことを好み、インタラクティブな関わりが満足

-
- 1) 聖路加国際大学国際・地域連携センター・St. Luke’s International University, Center for International and Community Partnerships
 - 2) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science
 - 3) 聖路加国際大学大学院看護学研究科（博士課程）・St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science, Doctor’s Program

受付 2021年10月19日 受理 2021年11月22日

感につながったと考えられる。親からも肯定的な反応が聞かれ、親子でからだへの理解を深める機会にもなっていた。今後も活動を継続し、市民とともに内容を洗練させていきたい。

【キーワード】 People-Centered Care, 子どもへの健康教育, からだの教育

I. はじめに

聖路加国際大学では、市民が主体となり保健医療従事者とパートナーを組んで個人または地域社会の健康課題の改善に向けて取り組む People-Centered Care（以下：PCC）を2003年から実践している。その事業のひとつに「聖路加健康ナビスポット：るかなび（以下：るかなび）」があり、市民が主体的に自分の健康を自分で創り守る社会をめざした健康情報サービスを行っている。主な活動としては、健康チェック、健康相談、図書閲覧サービス（健康情報の検索）、ミニ講座・コンサートなどを実施してきた¹⁾。

近年、文部科学省では大学の果たすべき役割として、社会貢献・地域連携を掲げており、自治体や企業などと連携し、地域の特性を踏まえた活動の展開が大学に期待されている。本学所在区の特徴として、年少人口が増加しており、子どもが多いことを踏まえ、地域で暮らす子どもたちを対象とした健康教育への取り組みを始めたので、それについて報告する。なおこの活動は、国連の持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）の「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」という目標3にも寄与している。

II. 子どもへのからだ教育の実践

1. 子どもへのからだ教育の意義

本学では、2003年に21世紀 COE プログラムのテーマに「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」を掲げ、その取り組みの一つとして「自分のからだを知ろう」というプロジェクトが結成され、「からだの知識はみんなのもの」を合言葉に活動を行ってきた²⁾。そこでは、Community Based Participatory Research (CBPR) に基づいて大学に席を置く研究者、保育者、保護者をはじめとする市民とともに、就学前の子どもに体のことを教えるための教材を作成し³⁾、その成果物である絵本や内臓Tシャツ等をるかなびに設置している。子どもは5～6歳からからだに関心を持ち、楽しみながら興味をもって学び、子どもがからだについて学ぶことに保護者も賛同している²⁾と言われており、るかなびにおいても内臓Tシャツやからだの模型、からだに関する絵本に関心を寄せる子どもは少なくない。

前述したプロジェクトは、NPO「からだフシギ」を立ち上げ、それを支援する活動がPCC事業のひとつに位置付けられている。NPO「からだフシギ」は、健康を考える上での最も基本的な知識であるからだについて、保育園・幼稚園の年長児から小学生ならびにその親、または保育士や幼稚園教諭を対象に、紙芝居によるおはなし会を開催し、からだの知識を広めることを目的に活動を展開している²⁾。これらのプログラム有用性と適切性の評価研究の結果から、「子どもにとっても大人にとっても、自分のからだについての知識を獲得すると、自分や他人のからだを大切に思うようになる、健康に気を付けて生活できるようになる、医療を受ける際に医師の説明を理解でき、自分で考えることにつながる」²⁾と考察されている。そしてNPO「からだフシギ」は、教材の開発、おはなし会の実施に加え、子どもに話しをする機会がある人を対象に「からだせんせい研修会」を開催し、5～6歳児へのからだ教育の普及を図っている。

2. 子どもの興味とこれまでの対応

るかなびには以前から、「自分のからだを知ろう」プロジェクトが開発したからだの絵本や内臓Tシャツの他、子ども向けの絵本を設置していた。るかなびの周辺環境として、若い世代の人口が増加していること、公園と隣接していること、るかなびの隣が開放的な喫茶店であり親子での利用が多いことなどがある。特に、ここ数年子どもの来訪、絵本の利用が増えている。

そこで、2019年度に公立図書館と連携し、同区の図書館で司書が定期開催している子ども向けの絵本の読み聞かせをるかなび内で行った。通常の広報の他に、直前に公園で遊んでいる子どもたちに声をかけたところ、15組が参加した。

終了後のアンケートでは、満足度（0-10）数式尺度の平均値8.75で、親からは「子どもが楽しめて良かった。またやってほしい」という感想が複数寄せられた。

これをきっかけに学童前の子どもの来訪が増え、からだの本やパズル・内臓Tシャツ、模型に関心を示し、リピーターも増えた。中には幼稚園の帰りに連日訪れる子どももいた（写真1）。

るかなび看護師は、子どもの興味に応え、自分のからだへの理解を深めることを意図し、動き回っている時に筋肉と骨の動きを示したり、トイレから戻って来た時に膀胱の役割を話したり、からだの働きと関連付けるよう



写真1 るかなびでの子どもへの対応

にした。からだの本を読みながら「五感って何？」と聞かれた折には、目を閉じて触っただけで何だかがわかることを体験させたところ、大変興味を示し、当てるたびに歓声を上げていた。聴診器で心音を聞かせた時には、「絵本にはドキンドキンと書いてあるけれど、ドクッドクッだね！」「子どもの方が大人より速いね」などよく観察していた。フードモデルに関心を示した時には、筋肉のもとになるたんぱく質が豊富なものを選ばせた。

子どもが複数いる時には、自分が覚えたことを他の子どもに教えたり、臓器の絵を書いてクイズを作ったり、子ども同士での交流が認められた。

親からは「からだの本がこんなに充実しているところは他にない」「子どもが行きたがる」などの声が聞かれた。内臓Tシャツを見入る我が子に親が説明したり、子どもが興味を示す姿に感心したり、肯定的な反応が得られ、親子・スタッフとで会話が弾むこともあった。

3. からだのおはなし会の企画

前述の状況から、るかなびでのイベントのひとつとして、子どもを対象としたからだ教育の実現可能性を検討した。まず、るかなび担当の看護教員と看護師とで、「からだフシギ」が主催している「からだせんせい研修会」を受講した。

この研修では、子どもがからだを学ぶことの意義として次のことが提示された。「子どもはからだに興味があり、素直にその興味を満たそうと学ぶ。からだの知識は5歳児から理解できる。自分のからだについてよくできている、すごいと感ずることにより、本人や他人のからだを大切だと思ったり、からだを観察したり、生活を工夫するようになる。将来、自分の健康を創ることや医療を受ける時に自ら考え選ぶことにつながっていく。」

そして、おはなし会のやり方として、場所・教材・進

聖路加健康ナビスポット:るかなび

9月17日 金 15:00-15:30

からだのおはなし会

自分のからだをもっと大切に思えるように、
子どもたちに、からだのことをお話します

からだの紙芝居やクイズなど
絵本やパズル・模型もあります！

5歳くらいからのお子さんに楽しんでいただけたと思います

からだ先生:るかなび看護師・看護教員等

参加費:無料 予約不要
出入り自由






図1 からだのおはなし会のチラシ

め方などの説明を受けた。るかなびの特徴は、市民が主体的に自分の健康を自分で創り守るための情報サービスを目的としている。そこで、これまでの市民向けイベントに準じてからだのおはなし会を企画し、地域に広報することにした(図1)。

4. からだのおはなし会の実際

1) プログラムの内容

るかなびで実施するからだのおはなし会のプログラムについては、研修を受講した看護教員と看護師、小児看護の経験を積みChild & Family Centered Careを研究している大学院生とで話し合った。また、るかなびによく来ている子どもに、プログラム内容に関する希望を聞いた。場所がるかなび内であり、対象は自主的な参加者なので、一般的な手遊び・遊戯・歌などは入れずにからだに関することに絞り、子どもの集中力を考慮し、30分程度とした。これまでの子どもたちの反応を踏まえ、子どもが興味を持って学べるようからだの模型や確認クイズ、ぬり絵などを取り入れ、インタラクティブなプログラムになるよう配慮した。教材はすでにあるものを活用し、「からだフシギ」が発刊しているからだの絵本の8つのテーマ「たべもののとおりみち(消化器)」「ほねときんにく(運動器)」「すってはいて(呼吸器)」「おしっこのおはなし(泌尿器)」「ちとしんぞう(循環器)」「のうとしんけい(脳神経)」「おとこのことおんなのこ(生殖器)」「かんぞう・すいぞう」から選ぶようにした⁴⁾。プログラムの流れは以下のとおりである。

①導入

その回のテーマを内臓Tシャツで示す

②紙芝居

「からだフシギ」が製作したものをを用いる

③クイズ・ぬり絵

からだの絵本のテーマ別にあるぬり絵を用い、復習目的のクイズに答えながら該当部位をぬる

④質問タイム

子どもの関心に応じる

⑤終了証授与

「からだはかせ」のメダルを渡す

⑥アンケート

スタッフが子どもから聞き取る

なお、新型コロナウイルス感染防止対策として、以下の配慮を行った。これも自分のからだを守る教育の一部と考えている。

①受付での体温測定・手指消毒

②マスク装着

③アルコール消毒可能なマットを間隔をあけて配置

④子ども同士の対面での会話を避ける

2) プログラムの展開

プログラムの運営は、るかなびスタッフを中心に、からだフシギ支援事業担当の看護教員、大学院生も加わり、サービスマーケティングの一環として、るかなびでボランティア活動をしていた看護学部生も参与した。

今年度7月～9月に6回実施し、テーマと参加人数は表1のとおりである。いずれも、金曜日15:00～15:30に開催した。テーマは子どもの年齢や2回目以上の参加者の有無を加味して決めた(写真2)。

3) プログラムの評価

おはなし会終了時に子どもに聞き取り方式でアンケートを実施した。保護者に今後の活動の参考にする旨を伝え、子どもには可能な範囲で質問した。参加者総数は21名で全員から何らかの回答を得られた。

参加した子どもは女児が15名、男児が6名で、年齢は4歳から11歳で平均5.7歳(表2)、兄弟姉妹での参加もあった。2回以上の参加者は5名で3回以上もいた。居住地は全員近隣で、参加理由は「チラシを見て」が8名、「誘われて」が7名、「テーマに関心」が4名であった。

内容については、「楽しめた」が20名、「まあまあ楽し



写真2 からだのおはなし会の様子

表2 参加した子どもの年齢(N=21)

年齢	人数
4歳	5名
5歳	8名
6歳	3名
7歳	2名
8歳	1名
9歳	1名
11歳	1名

表3 参加した子どもにとっておもしろかったもの(N=21 複数回答あり)

内容	人数
ぬり絵	14名
紙芝居	8名
模型	5名
クイズ	5名

めた」が1名だった。おもしろかったものは、紙芝居のあとに行ったぬり絵が最も多かった(表3)。21名全員が「また参加したい」を選択していた。満足度評価には0-10数式スケールを用い、5～10で平均値8.95だった(表1)。

Ⅲ. 考 察

1. 子どもの反応

参加した子どもの年齢には幅があったが、4歳～6歳の学童前が76%を占め、個人差はあるものの先行研究のとおり5・6歳から活発に応答する様子が認められた²⁾³⁾。子どもが「楽しかった」と感じたものとして、からだのぬり絵の人气が高く、子どもは受動的に聞くだけでなく、能動的に取り組むことを好むと考えられる。るかなび常連の子どもをおはなし会へ誘った時、「紙芝居聞いているだけでしょ……」と言われたことから推察できる。る

表1 からだのおはなし会の実績

	開催日	テーマ	参加数	満足度
1	7/2	消化器	1	8
2	7/9	泌尿器	4	9.25
3	7/16	消化器・泌尿器	2	10
4	7/30	運動器	10	8.2
5	8/20	循環器	1	10
6	9/17	循環器	3	10

かなびでの子どもたちへの対応においても、絵本を一緒に読んだり、クイズを出し合ったり、絵を書いたり、からだに良い食品を対話しながら選ぶなど、インタラクティブな関わりを求められ、本プログラムにも取り入れたことが楽しさや満足度につながったと考えられる。多くの子どもたちから「楽しかった」という声が上がり、紙芝居やクイズでの問いかけに答えたり、内臓Tシャツを触ったり、自分が知っていることを話したりできることが満足度につながると言えるだろう。これらの結果は前述した「自分のからだを知ろう」プロジェクトでの調査結果とも一致する³⁾。

参加人数については、新型コロナウイルス感染者が増加傾向にある時期と重なりばらつきがあり、宣伝規模を控えたことも関与していたかもしれない。チラシを見て、あるいは関心を持って複数回訪れた子もいたが、スタッフからの誘いや親同士のネットワークでの来訪が多く、広報の仕方をさらに工夫する余地がある。

2. 親の反応

すべての子どもたちに親が付き添って来ており、子どもがおはなし会に参加している間、後ろに座り子どもを見守っている親、少し離れた空間で休んでいる親、親同士で会話しているなど様々であり、人数が多かった3回目はSNSで母親同士が知らせ合い参加していた。

親からは「日頃からからだに興味があって本を読んでいるので連れてきた」「これに参加した後に祖母が亡くなり、この子が心臓の絵を書いて棺に入れていた」「普段は気持ち悪いと見られないのに、からだの立体図に見入っている姿に驚いた」などの反応があった。このように親が子どもの関心や成長・発達に気づく機会にもなっていることが示唆された。また、るかなびスタッフと子どものことについて語る親もいて、この場が親にとっても有意義であると感じられた。

3. 教育的な効果

プログラムは、学生に対する教育的な効果も期待できる。プログラムの実施にあたり、PCCを基盤としたプログラムの企画から運営までをるかなびスタッフを中心に、看護教員、大学院生、看護学部生で実施した。これにより、学生は、本プログラムを通して、“PCC”という概念を実践に結びつけてインタラクティブに考えるプロセスを学ぶことができたと思う。

また、学内には学部生が主導で子どもに体のほたらきを教える部活動もあり、学生の学びや実践の場の一つになることが期待できる。



写真3 多世代交流スペースでのからだのおはなし会

IV. 今後の展望

るかなびでは初の試みとして、地域の子どもたちを対象としたからだ教育を実施したところ、参加人数は少なかったが、楽しみながら学ぶことができ、満足度は概ね高かった。

内容については、アンケート結果や子ども・親の反応に留意し、市民と専門職とのパートナーシップの概念に基づき、ともに創っていく姿勢を大切にしたい。また子どもにからだのことを知ってもらうだけでなく、からだを大切に思えるような展開も考えていきたい。

今後も定期的に開催し、親や子どもへの認知度を高め、参加者を増やすことで就学前からのからだ教育の普及に貢献できたらと思っている。子どもたちが幼稚園を終えた後の時間の過ごし方として、るかなびでからだについて学ぶことは、親子でからだの理解を深める機会となり、大人がからだへの意識を高めることにも役立つであろう。

さらなる発展として、るかなびとつながりのある同区の社会福祉協議会が新たに開設した多世代交流スペースでのおはなし会開催の提案があった。まず、近隣のみにチラシを配布し、トライアル開催したところ、子ども・母親・祖父の3世代での参加があった(写真3)。近年、共働きで祖父母が孫の世話をしている場合もあり、多世代交流にも貢献できると予想される。

V. おわりに

本学が展開するPCC事業では、地域で生活する多様な世代にある多様な健康課題をもつ人々を対象とした健康支援プログラムの運営をめざしている。るかなびではこれまで、大人向けの健康講座やコンサートなどを開催してきたが、本プログラムにより対象を子どもにも拡大することができた。これをきっかけに、地域に開いた健康

情報サービスの場であるるかなびの利用者が拡がり，多世代において健康や疾病に関心をもつ市民が専門職を上手に活用し，自身・家族の健康づくりや適切な健康情報へのアクセスにつながることを期待している。

引用文献

- 1) 中村めぐみ, 高橋恵子, 大田えりかほか. People-Centered Care 事業における地域連携活動の促進. 聖路加国際大学紀要. 2021 ; 7 : 97-102.
- 2) 聖路加国際大学からだ教育研究会. からだの知識は5歳から！. 東京：NPO からだフシギ；2017.
- 3) 菱沼典子. 「自分のからだを知ろう」キャラバン：健康の基本情報「体」の知識を皆のものへとするための5-6歳児用のからだの絵本の作成. 市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点研究成果最終報告書. 東京：聖路加看護大学21世紀 COE プログラム運営事務局；2008：71-3.
- 4) 聖路加国際大学からだ教育研究会. わたしのからだ：からだの絵本. 東京：NPO からだフシギ；2019.